

3) オオクチバスの稚魚期の食性

太田滋規・桑村邦彦

[目的] 温水魚の繁殖場でオオクチバスの仔稚魚の食性を把握する。

[方法] 調査期間は平成4年5月15日から11月24日で、調査場所は山ノ下湾の主に旧御呂戸川周辺である。採集方法は、タモ網で週に1~2回、張網（垣網目合:25節、袋網目合:4mm角）で週に1~2回、小型曳網（目合:1.25mm）で夜間に月1回の採集を行った。採集した標本は、直ちに10%ホルマリンで固定し、後日、体型測定と胃内容物調査を行った。胃内容物は、動物プランクトン、エビ類、水生昆虫、魚類に分け、胃内容物全量に対する体積比(%)を目分量により測定した。捕食されていた魚種の組成を明らかにするために、魚類は可能な限り種の同定を行い、捕食率を調べた。

[結果] 胃内容物調査を行った仔稚魚は、張網で捕獲されたものが367尾、曳網で捕獲されたものが115尾、タモ網で捕獲されたものが59尾であった。そのうち空胃の個体は、張網で299尾（空胃率 81.5%）、曳網で25尾（同 21.7%）、タモ網で4尾（同 6.8%）であった。

捕獲されたバスの月別の平均全長は、6月:22.6mm、7月:46.4mm、8月:72.61mm、9月:118.9mm、10月:124.2mm、11月:152.66mmであった。

全長別に胃内容物組成をみると、全長30mmまでは動物プランクトンと水生昆虫で95%以上をしめていた。全長30~40mmでは魚類のしめる割合が53.9%と高くなり、動物プランクトンの割合は減少した。全長40~50mmでは動物プランクトンは胃内にみられなくなり、魚類の割合が71.6%とさらに高くなった。全長50mm以上のなると胃内にエビ類がみられるようになり、それ以上の全長では魚類とエビ類とでほとんどがしめられた。なお、胃内に魚類の出現した最小のオオクチバスは全長19.5mmであった。

魚類を捕食していた98尾のオオクチバスについて被捕食魚の種ごとの捕食率をみると、消化が進み不明のものが多いが、コイ科フナ型魚類は7、8月に捕食されており、7月に9.1%、8月に2.6%であった。コイ科ハヤ型魚類は8月に捕食されており、18.2%であった。ハゼ科魚類（主にヨシノボリ）は7~9月に捕食されており、8、9月の捕食率がそれぞれ44.7%、36.4%と高い値を示した。ヨシノボリの捕食率が高くなるのは、7月下旬以降になると、この水域に大量に出現することによるものと思われる。ブルーギルは7~11月に捕食されており、特に7月には捕食率が36.4%と高かった。この7月に捕食されていたブルーギルはふ化直後の産卵床から出ていく前の仔魚であった。胃内に魚類のしめる割合が高くなる30mm以上のオオクチバス稚魚が調査水域に出現したのは、6月中旬からで、7月上旬には多くみられた。この時期以降、ヨシノボリが大量に出現する7月下旬までは、この水域へのフナの放流は、オオクチバスによる食害が大きいと思われる。

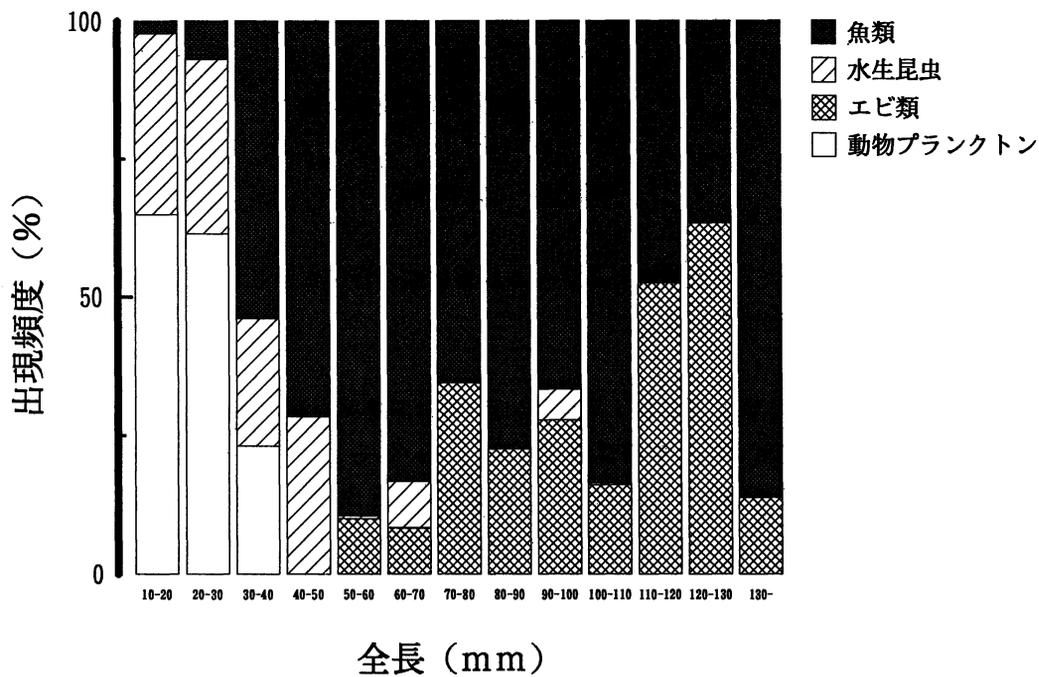


図1. オオクチバス仔稚魚の全長別胃内容物組成 (体積比)

表1. オオクチバスに捕食されていた魚種別の捕食率

[捕食率 (%) = 各餌生物を捕食していた個体数 / 調査個体数 × 100]

月	供試魚数	コイ科フナ型	コイ科ハヤ型	ハゼ科	ブルーギル	その他	不明
6月	3	0	0	0	0	0	100
7月	45	9.09	18.18	2.27	36.36	4.55	34.09
8月	38	2.63	0	44.74	10.50	0	65.79
9月	11	0	0	36.36	9.09	9.09	63.64
10月	0						
11月	1	0	0	0	100	0	0